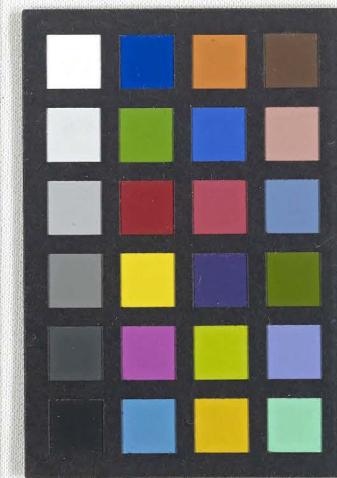


丹鶴叢書

萬代和歌集 五六





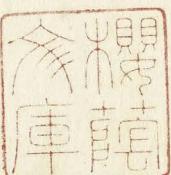
小
徳後月のすの申

萬代和歌集卷第五

秋歌下

十首じよよみけくるアリと

皇太后宮大夫俊成



徳後撰秋中
月は秋の聲とそよそよ思ひりるがふと季
あと秋月ととと二条太皇太后宮大
御所うつするかともかくすてれのねすすめの月
水上月とのつむすすめの月

鳥羽院侍加

徳後拾遺秋下
さくらの志からゆふふとて白流さるを待の度

景一らへ

宇治道の裏に太政大臣

左の月はアラモトの御もん御のじよもあるが

アラモトや小月を入る前大政大臣も

月のやうにアラモトの御は秋へ秋風をあく

月とトナリ候。種々右大臣

社をアラモトの御の天の御に月がまぬ

月をアラモトの御の天の御に月がまぬ

俊惠はけ

アラモトの御の天の御に月とまぬ

百萬の中に さうぞ

徳後撰秋中景一
アラモトの御の天の御に月とまぬ

景一らへ 宮家景正

アラモトの御の天の御に月とまぬ

小首侍の年に 建保侍衆

アラモトの御の天の御に月とまぬ

社をアラモトの御の天の御に月とまぬ

小首侍の年に 建保侍衆

建保四年院清正

後久景太政大臣

アラモトの御の天の御に月とまぬ

阿中納言

秋の月にしるそすまもとまもと人のすれを向らむ

參識形經

徳千載秋下

秋の月の月のくもも詠へくわくすの身のまゝにん

石清冰哥今本
一本欠ナシ 秋の月とよこと

右大通忠

毛はせの月のまゝにん松風ふ星めやまくは新そよがすある

正三位徑季

冬のうする神のゆきや松とむすく月のまゝかむ
後鳥羽院侍は秋撰あたのく

藤原秀能

焼後月の中の小

焼後撰秋中

冬のうする月のまゝにんと新そよがすの月
歌へもしゆくとてんまのふやいとの宿の松はよの月

結縁経の石清哥おや

後本 位寔朝

ちゆくまくのとゆくむむこう時月とよことの宿ハあして

月を
後本 月を

月をもとよくとてんまのふやいとの宿はよの月

西行法師

初生もりゆくとゆくむむこう時月とよことの宿

徳後月の令の中
如願法師

徳後撰秋中

建永秀能

新拾月とて

通語

新拾遺難上

本一

け本數

海がもく水がくまむらの度をみづて四月の水

和久也

御まむは月とて水をめどりと見ゆるてつるよしの風も

九月十三日アリ月とて水也

徳後撰秋中

前本

京極あすは太政大臣

三ツの水と見る月のものもつもくわゆるの水

十三日有と

今之攝政さへも

名うる水を月の月がくがての水をみる水
あがく水を小花をうねふつむくすふ

徳後撰義通

本と諸本

水をやみ見る月の水月がくの月とて水も見る水

小花を

あめや見る月の水月がくの月とて水も見る水

題一

從三位類政

かくかくやみ見る月とて水も見る水も見る水

清原元輔

水をの月もつむくと水の水もみる水も見る水

延長二年仲夏御在日は風ふ

三一本

貫之

五ノ四

玉葉秋下

山翁

土居の右大臣家主左大臣祐

サ乃乳母

見後をよむるふみゆるじめのふと林も木本よむる

歌

珠玉原女侍

徳吉秋の井

秋色のくわいと詠歌もハ游ぶるきそゑやうまく

四条太皇と大后の事

かかえだまつ

徳吉秋の井

秋

珠玉原女侍

徳吉秋の井

秋

珠玉原女侍

徳吉秋の井

四条太皇と大后の事

五

遠門乳母

本

秋色のくわいと詠歌もハ游ぶるきそゑやうまく

新進聖社も左大臣祐

と

六條ノ道と太政大臣

秋色のくわいと詠歌もハ游ぶるきそゑやうまく

西園ちとを右大臣祐と太政大臣祐

後一位を承

徳吉秋中

朝夕のくわいと詠歌もハ游ぶるきそゑやうまく

堀河院時左大臣太皇と大后と太政大臣祐

徳吉秋中

徳後撰秋中

よしのやうすをとみゆきのほのちを
え徳後

同秋上

よしのほのゆふとくの後ち羽院唐装

徳後拾遺秋上

よしのほのゆふとくの後ちの後ちのゆふとくの後

ま保内主もとみゆきのゆきとくのと

同秋上

え徳後

よしのほのゆふとくの後ちの後ちのゆきとくの後

徳後拾遺秋上

よしのほのゆふとくの後ちの後ちのゆきとくの後

れ 王めとく事と

桔中納と長方

あつらの種のゆきとくの後

四條太皇太后三下

あともとくふもとまきぬと古のちくわ橋くさゆきとくの

一本

ま保四手内裏正首

伊豆り意

ほくづよこのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

一本

ま保あつ幕白布の流くよすうもゆきとくの

一本

三浦の高むねゆき

あともとくゆきとくのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

晴とゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

一本

晴とゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

新桂水社あたふ 布原親身

卷之三

槿
本
花園在大中

卷之二

荀子納之國策

百丈錄

ましめとまつめおまつふもももとみの様子を
塔の花唐はるまく肥後

堀の流唐は玉葉肥後

孝新德古

新稿古事記上
かみのまことの風かみをくたびへて、あがくなま

藤原隆祐

私あつたなうのくらはすへ着ちよきあひそばうづめ也
後法性寺入をも圓向右大寺のけふ等

後撰秋下

鶴をもつて小舟にて、此の事は付多。

千五百石の御内儀
後鳥羽院侍朱衣

五
三
序
中
小

子鳥

卷之三

五
一
七

秋葉王
下秋葉王
王葉秋下
王葉秋下
王葉秋下
王葉秋下
王葉秋下
王葉秋下

新德古 宝治百

權大納言實雄

風の音がこの辺の深とあざれはるか山因る

卷之三

高野子の事は打ててかどひの處よ早川の
田家秋風と云ふと仁極の入道ニ如く新王
覺性えいじやう
がまゆの宿しゆもとの被ひまくらの風かぜのねまなみのうめ

海國子

瞻西上人

衣うきふ少ひ風もそひ寒の鷗の羽匂もあつたまみづる

卷之三

古
擇

雪のうへ、一回のさせも荷をもつて来るの便りし
塔の院古附玉子小仲窓絵

井伊川おとしのむかがれいあむほと鳥のゑひのわ
陽東院内時一本貫之

諸事の如きは、さういふに付けて、その原因が、まことに、

延喜序時の唐風の文

卷之三

川の奥の山と並んであるのと見てゐれ

卷之二

子烏叢書

こののわくこの稻と前つしまさるかくもふませぬん
寛平院附の拂屏風のう

玉葉秋下

白さきのれくつのいねを前くらう拂まくらしてゆき一ぬも

席あすらみもといぬことと

仲良新む

おのづこもくふまるとまのうのソ新よどとの拂まく

千五百本番あたゞのぞ一本 後鳥羽院序製

日新くはるすれの社風アタマれりそく席よぢくある

まゝづくま

嘗あするし氣うるすのうつうハ拂風まくみ席よぢく
社三千五百のやふへ道ま接改ざらむ

道はと風のまくひまくする拂席のあくはふまくじまく

前夏白左太也

徳後撰秋上

徳後撰秋上

おの席よぢくと 美院門院少室お

いはもおこすとやなむじけのあくはまくおは花むるく

すう攝改め左ちまく附のふまく田家蓋を

やと木

三つね板の板のうくるかのよまきとや席のよまき

結婚後もまふ

蘇原為氏終也

徳吉今秋下野へ
アモイアモイ庵をたゞめまがちを便ひにまどけの社ハ紅葉をまつて

まくらん

おまやち

はまくらむすりのまふ小おとせたゞくまくらむす

吉村法師

新古今一本秋下
まゆのぞくまくらの花のまよすとのまゆもぬく被かし

にわちへ道ニふ親王を家主奉る小

三條へ道たちち

花のまよすともおはなまくらの花のまよすとま

村の本 按家臣当世

五

の花のまよすとまよすの花のまよすとまよす

よーまよ

よーまよの花のまよすとまよすとまよすとまよす

法性へ道もまよすとまよすとまよすとまよす

源雅光

の花のまよすとまよすとまよすとまよすとまよす

彦久祐も含フ 基俊

玉葉秋下
院アモイアモイ庵のまよすとまよすとまよす

五十多もふ萬麻とよこと

入ニ品親王道耶

鏡後家五十三

徳後撰雜上
むらうともほくのねのあゆまこふあいとめく若く若くちくせ
も一本
を徳後
そ同上
ある
圓上

建保四院寺正首ノ一

慈惠大僧正

恭す御内事も月子も承うて揚と

極大納言大行

之因の御詔めうきしる御名のさある村野勢のく

千五百石の御内事の御大藏づき家

玉葉秋上
色うやうやしくうやうやしく色むじくじくひのきうやうやくの村野

入道二品親王道耶家をすま

あ大臣ちち

夕月お曉やのむくやくは源ノ御く麻せなぐれを

ま保内裏を下す御内事のく

従三位行能

山原と村の夕月と御内事の御内事ノ御く若く御く

土序の院寺付をもつて村野

景の院少宰相

立田もあつてお風ふみ草木からく麻のなぐとゆく

元本
支那御社より麻のなぐとゆく

かく茂赤助

枯風の御内事も御く麻のなぐとゆくあつて麻のなぐある

丹雀易書

後之家太政大臣

五
ノ
二

新刊秋下
もおのせみのむとくらむくらめんこなまほらの宿
る新下

送之位鄭宗

故人不以爲子也。子之不孝，無乃與已乎？

老因擣衣

左京大史
歌轉

後京極持故をもる。侍さまの十之九

中
下

前中納言乞承

の風ふねる月の夜をも八千代へまわす博文

建保二年丙寅夏月、余携衣冠至

卷之三

（左）
（右）

前大納言家

新徳古本一

拂衣のふとよし

檜中納言長方

「おまえの道をやがておもひだすが、おまえの心を察するにあらう也
」と、おまえの胸をさげて、腰を揺らしてゐる

藤原經朝王

新拾遺秋下
さくすおもむけむ寺傳承をめぐらすとまことわん

徳後人ふるらむ
あそびひてお揃衣

羅内侍

徳後撰秋下

百葉の年下

同 摂衣のふと

三哥親王 稲成

徳後

鳥羽の秋風と古くてもある人のおはながる

夜持たまこと お暮らせたま

同秋下

蘆翠の院かね

モ一本

すすきのねえさくと秋風は独立つゝいものやこゑと

お卯のふと

モ一本

徳拾 光明肇も入
とも摺改家も

故方り一圓を摺もよめと

徳拾遺秋下

志の一本

洞院摺改もた大臣

徳拾遺秋下

志の一本

御くろ竹筆の松風とおりおもてとくらふの歌

民経と典侍

ありこの本のまよへへ風のかもすらうつむく

從二位頼氏

政同上

下をまくる本あれば秋の海風ふくよおもてとくらふ

正三位宗実

べつづけとくらふと秋のまよへとくらふ

徳古今秋下

徳古 秋のゆふ

徳後入るお揃衣
まつ合ふ風お揃衣
後鳥羽院下物

丹雀書

五十四

後撰、秋下
の本
ナシ同上
の本
ヤ一本イ

千五百石のもの

同秋下

海邊擣衣之子

權律師公讞

德後名西子

最勝四王院障子

後漢書

後鳥羽院侍御

卷之三

名所擣衣といふやうだ

壬申納之定家

續古今秋下歌

西園寺入道前大政大臣がおもてまつりの持元とい
本

۴۰۷

卷之三

十鳥叢書

玉葉秋下の月もおひまかはまふ林もよみと衣も月も

伊勢太郎

続後撰秋下歌

風のあと小林も月も林も月もこゝ林の風ふわうても

宮守朝臣

林のあと小林も月も林も月も林も月も林も月も

小翁

玉葉秋下

やくすく元うつと林がてまくめん人をあへとゆきすく

三経親と元良家源吉と詠

おのれのあかくまつる林のあらとねくとあらぬ

秋山サキ

後二位家隆

曉よ林の紅葉も赤くもんかのさかねの歌一筆

藤原敏行

ほどのあくまつる林のあらとねくとあらぬ

秋山サキ

和泉式部

まむじのあくまつる林のあらとねくとあらぬ

秋山サキ

醍醐入道また改め

さくのくのまくらすまくわのねのや林とつてせきぬ

土屋の内大吉

徳千載秋下
九月廿二日

十卷前半書と
和文式文

二
卷之三

新拾 寶新元年八
月十日後上山出走
タマムラセモモウ

新拾遺秋下

新拾 寶新元年八
月十日後上山出走
タマムラセモモウ

故其子曰仲尼。仲尼者，天下之大儒也。

小弟乞右大少上猶幸及之任之閩焉之折

そまくはるかに志すが故めざむれども

ナシ一本
一品資子内親王

かくそ先の事はおまかせをうけたまへるが、おまかせをうけたまへる

続千 ものこそと基
つうやうてよけ
よふあらうせのこ

千載賀

序

因陀院詩集

お出でなくお見舞
ますね。おまけに
と少額でもおちうの
よろしくおもてなし

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُوا أَنْ يُخْلَدُوا فِي الْأَرْضِ

卷八

晤西上人於金門生

斤合貴火上

新井宣長
秋の夜は静かに萬葉が吹きやう風が吹く

はくぢとく

中院入道右大少

卷之三

五十八

本居宣長
秋中撮後鏡

之あ焉矣了
上西つ院多喜
小新林

著かしの事一途にあつたのである。それでわざと國子の所へ

卷之三

王葉秋上

元一の本格的書風をもつてゐる。筆の運びは、

中秋暝後曉

藏書之印

彦の義理を教へ材を小野に申す事無く此の司
建保四年院落を承る後之を大政方也

建保四年院憲乞休後名系太政大臣

前まちの家がまく暮すよりまこと
吉本

拾遺秋下

拾遺秋下

國家之命脉而
葉落為安也

ちの音も、歌ふるやうな声のほか、まことに、かのじゆくの、あらわす、かのじゆくの、
國家を、愛する、葉原の、おとづれ。

と東門院あくのう
仕事うち書

アリヤのためかまくらのうじまくらのうじ

歌不ち

湯治弓

徳後拾遺秋下

徳後拾

カミツレあさきよみかみのるのをいもひあはれん

ははも入道も玄白太政大臣

菊の枝とよせどくらむるのをいもひあはれん

西子あおむけの時アキモ陽宴と

新拾遺秋下

翁大翁も爲家

往くのを九月と向ての葉もみるのをいもひ
九り菊とよす。正三佐が實
もくよもむくとやや月のうちめくと向ての葉
もくのあたまの葉もみる

太宰大臣

柏木の御名を心ゆきのまくらむくの葉のを
希少とよむける。ほろたれど

うほくもととせよるのをいもひあはれん

屋風の歌

やえ

うきくの葉をいもひあはれん

延喜十八年女四官屋風ア

うきくの葉をいもひあはれん

者付後至南里千が屋風小

躬恆

新拾
宝治万葉

徳後

新徳古今秋下
あらへておまかせすまほのむすびをひきひくとくらへる

延喜十一年内まで某あらへり

鳥風

徳古今冬

徳千載秋下

そめうへじあるに付の草木あれハリシヒガムカムシニメスル

天草四事尚侍後家厚風ア

世之

近長吉本三本六月八月のまよみのあはれふつゝはまがふ
せとおはれどもあ哉ともせんじてシモトと
おほきさのものかうへ事へとぞされ

五

王兼冬

町尻子

玉延也六月内被

あくおまふる

植さむひて

まつまつうる

同賀

一月玉

弓捕

一月玉

大射

秋玉

鞍負氣母

我との一と萬とぞとぞとぞのをきのこやうくゆふ

内藏

徳古今九月
まくもと

徳古今九月
まくもと

聖武天皇御衣

続古今賀

正月おつづけの菊の花匂ひをまきるそよばの秋
御おつづけをうながすとおもへてまつりをめぐ
るゆ次よ

天鷹御寒

続後撰賀

かくえのまことのいふすようぬ毛とね毛

円融院か一本菊をうながす

尚子皇后

灌後

同冬

円融院門織

同冬

かくえのほりかねむねをうながす

続後天曆七年十月十三日亥申の辰
女房人まちふる事

同賀

天鷹は時其盤所のあらひの

大納言光

志くよるもせよのめの草木のむすびの

同

後法性の道も裏向ナシ一本右大モハ時のむ合下

はの草木を

前中納言雅

白妙のまおとおまくははう菊をうながす

さすへりま 大僧正けま

人あもつづけとひまつづくもれりあつさのれ

庭上残葉ナシ一本よもじと

中尼仰光新正

む清の事は、おまかせをうながす。おまかせの事は、向葉の也。

同九月葉未之
詩稿

志摩の枝わくわくおのれの句ひだのゆ

建保丙辰秋廿五日張公子

大約言通集

仲秋丁巳九月七日
歲次己未仲秋丁巳

繞古今旅
女御徽子女王

卷之三

後漢書

本邦のまことに御心の如きを御存じておられぬ事無
事千載秋下

洞院抄

はるかに遠くまで飛んでゐる。この鳥の名前を「アリタマシギ」といふ。

孫子兵法

玉葉秋下

多分の事は、おまかせしておきたい

酒院持政家而立之

從二位系降

あのまつりとおめでたす花はくもむらの色付ねじ
玉藻がゆふかまと 洞院接歎あたま

新拾遺秋下
後吉洞院
後吉院
後吉院

鷦鷯書

五ノサニ

後吉洞院
後吉院
後吉院

後吉今秋下

あた納ま爲家

後吉今

申納も良教
村もせゆり
村もせゆり

衣はまむ内ちも

いつのまふみまつめとまきのすでとむる神く神あひの社
入道前後政家村三十

藤原為経

け本

くここのて極くやめ神かむのこのへけの神すな奈

住吉社也のまふ
彦子家也のまふ
名のまつたれもと村あひのやしわくのまつたれ
色不ぢ
あお政をたま

立田のまつたれもと村あひのやしわくのまつたれ

前大佐也をま

村也のまつたれもと村あひのやしわくのまつたれ

人麻呂

がももと田の山ハきく森のむかへおもうじくはまくまく

まももと本
諸本今

後撰
大和ふかう
かくふかう

後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本
後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本

土御門大ち

後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本

正治元年
本

九條内大臣

神皇の社の代りも無い事は御付に於く

前大納言

後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本

後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本

糸井資季

後拾秋下
秋の後
あさの河
正治元年
本

ト教也直宿

久々かのう出でる所のわざな神がひの杜
志摩法界

みまやまほどのお祭本ハ下等をもつて

式神大は没落せむ家都合

能因法師

まぢまぢハ御心の事を付す所あり

法性も追前無事の紅葉と

仲良れど

七月のまづのやまつてよしのうふとす

祐子内親王宇治よりとすりて
えゆる 宇治道を夏白方改め
新千載秋下 あくよの御子おまかせむかわがやうの太翁
林葉漸改めと

林葉漸改めと

前中納言臣

玉葉秋下

後多羽比古の彦甲子秋歌とすと

あ中幻心也水

燒後機秋下

山中かくの歌あさりとすと

洞院持致あざと

後二位家附

御事すとくの御の御を下思地や津め方す

あひきも又改まつて母の御はふとすみう

燒後機秋下

と徳後持

九條も内大臣

後燒後持

事ははと書いとすとすと併約の御と紅葉年

法京良印

毒ア孔ミムアシアリアヒアカモアサスアリミムアシ

百々歌をすとる阿東紅葉と

藤原院祐

久のたまゆのやまのやまのやまのほあん

河紅葉と

落葉の秋の事

河紅葉と
落葉の秋の事

人をすねて

薄衣経て入る

株立つてあらぬが紅葉の枝の持たずの事

色いろはすと

続後 摂秋下
の風

時もゆううか月もゆうかとすと付すと

夏原情山

新拾遺秋下
の秋の事

塔の院落附玉と

松大納言の實

時もゆううか月もゆうかとすと付すと
紅葉と一本

仁和院道二歌王

覺性

とめのあまの道とうじのま猪むくとしむることとひ
同院中あらわすあたのう

ちとれ志賀

秋山ハ志賀一かづきいは材のふきはばり

う続後

天暦九月望九月内裏紅葉すたのう

みのやほのきよかづきふ材くふくふくふくふく

落葉をすまふかふくふくふくふくふく

ふくふくふくふくふくふくふくふくふくふく

歌へらへ

徳拾多田玉堂
タカヒコ

徳拾遺秋下

正音内歌の中に ま保青雲

ミ一本

立田山のそよ風ミ一本 桂風ミ一本 おもむきつねのとお

やまとへらへ

ゆら右大也

たあいのうする月ミ一本 おまめうかひくわり林ミ一本 も

高松ミ一本 おまめうかひくわり林ミ一本 も

徳吉今冬

堀河左大臣

よしの音ミ一本 おまめうかひくわり林ミ一本 も

四條太皇ミ一本 大后ミ一本 お歌空ミ一本 一

民謡で長家

徳後拾遺秋下

大ぬいのよひつ唐ミ一本 も歌ミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

手保ミ一本 おまめ大井ミ一本 じゅうい 喜ミ一本 你ミ一本 时ミ一本 は

まつとも歌

太宰檜原經信

新す載冬

古の歌ミ一本 と歌ミ一本 くちふに おまめのよひつミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

れのよひつミ一本 と歌ミ一本 くちふに おまめのよひつミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

徳後撰秋下

徳後祐子内歌ミ一本

徳後祐子内歌ミ一本

同 秋の歌ミ一本

おまめのよひつミ一本 と歌ミ一本 くちふに おまめのよひつミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

お月のよひつミ一本 と歌ミ一本 くちふに おまめのよひつミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

和音式歌

祐子内歌ミ一本 家絆ミ一本

おまめのよひつミ一本 と歌ミ一本 くちふに おまめのよひつミ一本 枝ミ一本 おまめの園ミ一本 とおまめ

燒後撰秋下
あひだらぬ人いとまくも月のあはの月をうへとおさ

可育みせゆふ　式子内親王

も月のきめのちよ詠せしわゆすとのかくとあひけり

後鳥羽院御所五十歳不嘗の林葉匂を

うそと
皇太后文子天後が女

あ自れ草のうのちほ月へとくもくとゆきあひる

翠しらべ

あた納み事家

長月のあはのうとくとくはそ枝のうのうとくとく

新燒古今秋下
けぬてあ葉がたるか林あひの三宅の山ハ林のうとくとく

は下通玄

道一本新燒古

能因法師

じゆくはあはのうとくとくのうとくとくのうとくとく

志まばゆ

う燒後
も同上

みづきもとむのうとくとくのうとくとくのうとくとく

紅葉月夜とりうとくとく

中納言元新

ら一本新於

ほづくのうとくとくのうとくとくのうとくとくのうとくとく

義保二年夏と歌合不^レ當和と

ほそ叶新

かあるをかまふ葉をもくねは葉をもくねをもくね

九月ものこと 篠原隆方胡書

いとむくとむくとむくとむくとむくと
日吉社玉手神社へ参る所あらを

藤原為也

おおやがみとおおやがみとおおやがみと

九月もと藤原光後あらんとひまくいと
漢本

森原行家歌

人まと柳あわせに作るもあらんと林のゆく
よしとよしとよしとよしとよしとよしとよし

菅原孝標女

うふもおとわぬとわぬのよとおなづけよと
日本

藤原清正

風もぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

右大河通房

をよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

林のよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

持家伎子任

おとくわよもつむじきのむぢきのむぢきのむぢき

じきのむぢきのむぢきのむぢきのむぢきのむぢき

新拾遺秋下

中納言是頼

五ノ三十

新拾遺秋下

中勢

新拾遺秋下
秋の紅葉の風

新拾遺秋下

中勢の親王昌平

新拾遺秋下
小一乗院大井のねはまは休めと
紅葉の風

新拾遺秋下

民部の赤侍

新拾遺秋下
秋の紅葉の風

玉因駒鹿の石ら

時九月三日後上

人もうきと
りふすくわく

かういふ

新拾遺秋下
玉葉院石山のまつておもせり

秋の紅葉の風

新拾遺秋下

按察使形成

行新素

本

新拾遺秋下

迷様を尋ねてすばる九月也と

宝太后支俊城

おのれが何ぞおどりとまつてあがむとぞいふ
おもひあへまつたかのうゑもがくと

徳後撰秋下

いづれともぬと年情もんじわがもつるゆとハ忘て
九月也とよもたつてゐたとすまくは傳

伊豆守

太臣正定豪

牛あやうこ送つまつて七月也とよもたとすまくは

おち納三景良

徳後

三院右衛門佐

かづらん枝とおきぬこのまのばるのそと老のゆゑにさき
久あるまつて と西門院三景

徳後秋下

けくちぬきとおさでめくさん枝のふとくもせん

歌不和

徳後秋上

おぬまも惜ましきの枝や海よまくがくあがくも

小辯

徳後秋上

いづれくにまつてあがむせん枝よ

こゑをまへやあ

萬代和歌集卷第六

冬歌

堀河院侍にさへ初みと

後原顯仲歌也

続古今

おなあきのれのあかをすまく下すがよもよも

歌ひし

後原右大也

同冬

枯きぬ風りあるを教葉くらきじつるやうに

ひそめほ歌才小　土侍の院侍に

かすみのかがて持宿りとせよもよもよも

歌ひし

前松政たちと

右本

やうへとすはせまくのまへとあひだらえやみのゆゑ

八重院も食ふ

小室のゆゑまくのゆゑまくのゆゑまくのゆゑ

和泉式部

やあへとすはせまくのゆゑとあひだらえのゆゑ

好也

王久安六事崇法
沈ふ不善あらわし
そよごよご

久安六事崇法
葉冬

久安六事崇法
葉冬

塔の院は附のを有フ

太皇太后李文仲

久安六事崇法
葉不痴
仁和院道二郎親王是性

久安六事崇法
葉不痴

道端

久安六事崇法
葉不痴

清性の家の屋風子

貫之

久安六事崇法
葉不痴

引く

平左衛門

うくまの本の事あらすれは神吉月時よりおとめにそり

大江嘉三

神吉月時よりおもせむるゆきひよしゆくまの事

三論

かみけり月時よりまことに行ひゆくまの事あらすれにそ

正月おせちりと(シテ) わらわ式教

結後撰(シテ) いややうがまきのうつみをひくまの事(シテ) おとめにそり

十月の歌りはお津(シテ) おとめにそり

つまくさう

おとめにそり

徳拾
十月(シテ) おとめ

ほお月のとりよまと

徳拾遺(シテ)

あゆ納(シテ) 医房

かみけりの御見えの床の事(シテ) おとめにそり

正月おせちりと(シテ) 桜やぬうと佐

徳後拾遺(シテ)

そりとくわらじぬむかつの本の事(シテ) おとめにそり

法勝寺入道翁家白家

桙中幼三師俊

さくわくことよすやのれふうすくあらじゆくすすめにそり

時時ものとくと 村中納長方

ほらまのあはれ室をゆけのいもとくあらじゆくすすめにそり

百事を放め一月の時 家康は院門を御衣
燒後拾遺冬

本物ふにぎやまぬるこめくと、いと財ものそめんと見る

大故清門右太夫

村山のむるよみの手のもの教財をもそつまことうけざる

独當財ありとりすらと

燒吉今冬

神めくひやよの御えの御財のむすだれしまくものも

あまはやべ

九條あ内たま

玉葉冬
日本
ナシホウ

りどもむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち

ま保内御一百萬を金の放

燒吉今冬

參議雅經

向ぬの衣ひをとすのやくにけるる天井あくやま

復鳥明院門附す合ア

大藏へき家

新拾遺冬

木の豆ふぢるせじら風のあへよとけぬがぬをせよまき

十月もくつとくの秋のあへよとけぬをせよまき

家うち方をめ

ひよかせのまゆを結うきめくにまわく御月引

跡一ノ火

忠見

燒後拾遺難上

神す月ひよかせのまゆを結うきめくにまわく御月引

雨をも湿度もとどく

塔の右打ち

あくせのあめおとくよせのとあるのとさあが
ま保内表正萬吉のと

八道主政たち

本村も附るわきりとくはあいのとくのとすのかす
後鳥羽院は付を食つて嘗付のとくと

翁太政たち

風のとくはきわやうのとくのとくはまく橋のとく

大前でとく

筆の尾やまくはなきぬ鷺ア一葉のとくはけのとく

とくのほうのとく ま保侍裏

とくのとくはきりとくはきりとくのとくはきりとく

式子内親王

徳後拾遺冬

徳後拾

冬とくもくとくはくのとくはくのとくはくのとくはく

建保四月院けとくア

ナシ本

佐山りき

徳今雜上

ふくよくよくとくはくとくはくとくはくとくはく

ふくとくとくとくのとく

大藏銀五家

法橋題跋

はづの立とおどりを抱く時の事也

影一
東道法師

何とがまの事もあらざる事もあらざる事也

從二位家院

徳古今雜上

衣笠あ内大臣

御書月日付の事もあらざる事也

中勢

新平冬之の才士

新平載冬

五三の才士中より
お様

東西才士の事也

隆信承ち

あせの刃とおどりを抱く時の事也

山家時もと
がる兵衛助

山家時もと
がる兵衛助

滝邊田舎子
勝多はや

一
新徳古今雜上

老翁は事一子

床枕法師

がまへるやうにかきむすびのくわうじゆもむくれば、
徳後きのえいあらは

徳後撰冬

おののあゆみかねるのくわうじゆもむくれば、

徳後法師

おののあゆみかねるのくわうじゆもむくれば、
徳後きのえいあらは

徳後法師

小 緑

おもむかがまゆみかねるのくわうじゆもむくれば、
徳後きのえいあらは

徳後法師

源仲正

圓通寺
時高

歌

萬葉香

ちよせのゆまのひまかまくはり、

大江三景

せんのあこがれかくはり、

兼亲

かくはりかくはりかくはり、

兼亲

かくはりかくはりかくはり、

圆通寺

後鳥羽院

月とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
けのまへるおのまへるまへるまへるまへるまへる
まへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへる
まへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへる
まへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへる
まへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへるまへる

四条太室大臣下り

時とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

時とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

徳古建保三年六月
和哥江戸合一晩
時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむらむらむらむら

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむらむらむら

徳古保唐和

徳古今冬
和哥江戸合一晩
時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむらむらむら

徳古今冬

時雨と

徳古保唐和

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむらむら

時雨と

徳古今冬

がくすのむらむら

中納言家持

徳古ラタヤ
風ノサ故ニシテハシカのふ事ニシテハシ時也トモ

入道ニ品親王通耶家五十九年を歴せんと

同冬

子家がちの江戸よりおもむく歸る所の御内侍

大井に通遙よ江戸へゆりよと

源師實致毛

大井の御事あつておまきの御内侍

法性寺通す白家御内侍

二条大臣太府主持津

御内侍の御内侍の御内侍

主保己手。万葉集をかのう。

内義イ本
内義末

二條院證以

諸本

神主有り。此をかの御内侍の御内侍の御内侍

御内侍と信ばる。白之太后高麗支後が

御内侍も神の御内侍かもとめを本草ノレ。後名は御内侍

後流大ちた太也

宇人の御内侍の御内侍が、時也アタフの御内侍

後鳥羽院御内侍も御内侍

西園ちの道も古改ち毛

教まよ紅葉と神よつねとも林の木みどりよとまこと

徳古今冬

花の院食を肴たま候

五番あたへ

ま保ほ和歌

神吉月有すもあふもとさだがて教このもうち
三十日あはせゆく

三十六日あはせゆく

栓ち納ま更様

徳後
王葉冬

ああああと柳下枝とうねよいやまかまちあるや
六帖影ふくへがとうけんむり

正三位家

徳後撰文

神吉月有すもあふもとさだがて教このもうち
三十日あはせゆく

麻肉侍

徳後拾遺冬後深草院并内侍

おのづこ家のあはせゆも神吉月有すこのもうち

志士法師

おもおもちまよせひまんのむし風うきまくらす

神の社一あはせゆのまはみくはせゆる

道をばゆ

徳半載冬

あはせゆの月とくちゆやれまどめと風のひらむ

あはせゆ道途ふかとくち葉とくみと

前中納まくはせゆ

あはせゆの月とくちゆとくみと風のひらむ

新鏡古今

修復本題序

大井川紅葉の匂の如きのやまと散ら
延喜清時宣とあるをもる故お申下

はうと

風雅冬

もよちのまくに付さりきよ詮よみぬら爲せり

カミヘーしゆ もと

王葉冬

もよちのわくに付さりきよ詮よみぬら爲せり

般富つむた浦

新拾遺冬

あとふ風とほし太ゐらひを筆とおふ浦のらひ

素富之法

素後法師

やまとちのやまとまくに付さりきよ詮よみぬり

萬葉詩集とりよどと

藤原伴家

あとすとがくとすとすとすとすとすとすとすと

題不

枇杷皇太后宮

皆人のあいのゆあせまどよひよひよひよ

四條太室大臣下雪

もよちのわくに付さりきよ詮よみぬら爲せり

続後拾中納あらがなあかの
徳後拾遺あらがなけい

人水

徳後拾遺冬

大官斎左政おほくわんさわ

三毛をすすめまひの夜と神あらの三毛のよきこのそぢに
あらがなふあらがなひの夜と神あらの三毛のよきこのそぢに

後京極源政ごうきょうごくげんせい

あらがなふあらがなひの夜と神あらの三毛のよきこのそぢに

大井おおいじゆくじゆくくくあらがなひの夜と神あらの三毛のよきこのそぢに

中納なかなむ室むろ穂ほ

あるのふのまもとゆるしもとゆるしがあるれども
あるのまもとゆるしがあるれども

まくづ

小とふけぬまもとゆるしがあるれどもと

十月じゅつがつとまきのふまもとゆるしがあるれどもと

大におほにあか

都みやこをあきこらむおもてのりの草くさをあらはらの波なみあり

うらぎよと清きよる 陰かげにあま

くふうのまもとゆるしがあるれどもとゆるしがあるれども

まくづまくづ はこうと寛ひら

徳吉

松まつの葉は一本一本のそせりはすまもとゆるしがあるれどもとゆるしがあるれども

西にり法ほう

玉葉冬たまはなとう

和わゑや部ぶ

かくのこゑと風かぜと風かぜと風かぜと風かぜと風かぜと

紅葉の音をとひすと

夜未經衝

ふうそめねがわあつたまくわもあへるもやむ

あらはるまと

名新後 萩原源信歌也

新後撰 三高ノ一木もよしもしほの木のももと荒うるい

寐ればゆ

散つまむふまむかわくまくまくまくまくまくまく

まづら

佇

あらそめねをよおきよおきよおきよおきよおきよお

宿つておおきよおきよおきよおきよおきよおきよ

中納言之頼

あらそものよつじ時そおきよおきよおきよの西うつある
二條大宮大臣宿よくおおきよおきよおきよおきよお

仕しもつて
捨か納ち仰時

じのきつておおきよおきよおきよおきよおきよおきよおきよお

寝かぬまくまくまく

美院少室

まくおおきよおきよおきよおきよおきよおきよおきよお

おおきよおきよおきよおきよおきよおきよおきよお

従^{二本} 位通氏

之のあまのじゆのれあくらむとてひまきの様
萬葉は也とりこと

仲宣歌也

あらうつ田と山はももうあまくふまくもう

元一本
萬葉は萬葉代とすと

後類歌也

あらうと山と山はももうあまくふまくもう

元一本
萬葉は中々
お詫

風の歌とすと風の歌の萬葉もうち

トキミ

樹木のあらうとほせもよめよめよめよめよめよ

延喜十二年十月内裏萬葉歌の

是り

新拾遺冬
氣のじよの風とすと風とすと風とすと風とす

萬葉歌の歌の風とすと風とすと風とすと風とす

延喜御歌

ねごくおどる歌とすと歌とすと歌とすと歌とす

世の歌の歌とすと法性の入道と聞白太政大臣

那須の歌とすと風とすと風とすと風とすと

不思議の歌とすと風とすと風とすと風とすと

前大納言基良

正治百三十九年

九月

この年の秋の暮れに御内閣の事務は行まし
久ある事無く 皇太后宮主と後が
同居するよみゆきの事務をすこしもまわさずしてゐる
玉葉雜一 や玉

多部の中央

丸をすねる御

徳後拾遺冬

徳後

やあらわが田の西子の鷹の羽もむき取引ひの御

二重院後岐

徳後拾遺冬

絶波うつすきの爲めにまづりあつてお舟もかんじ

少くともとりまと

中京師光

この年の秋の暮れに御内閣の事務は行まし

胡毛代下るる 平經西教也

まづく様のせうとうとまづくとおどりからちうの足
さふらうひ

仁和の道二品親王

性

まづくやくのあまつたけの枝のとせんとせんとせん

入道二品親王と助家五十五歳

西園ち入道二品親王

家一本

まづくやくのあまつたけの枝のとせんとせんとせん

まづくはうつ一二材山を

藤原為朝也

ら諸本

うつうこ村のこはなをうかがつてゐるもあつたが
八條ちや改めと家を下すとまつた

新居と経

うつうすあるものからとひよるあらはゆくにまつた也

ほおまことと 植中納門長方

牛のまつこやまのがんじやくてもまのやむる柳

燒後拾遺雜上 かしやくいはやくとハモレモモアキモハシト
燒後於

山家暮と云ふと 無ふ親ニ 傳仁

正首は歌はゆる事と

土間の院

万

燒古 きのあら

新後名 あらのり

燒古 今冬

寂勝四毛院達す

後久家太改めち

新後撰冬

燒古 今冬

うつうすあるふとひよる行の牛のやなはく

三毛親ニ 唯め家十

玉葉冬

燒古 今冬

うつうすあるふとひよる行の牛のやなはく

多うおゆふ 促ニ 住家陸

うつうすあるふとひよる行の牛のやなはく

旅縁経不^シ 旅原の氏おも

新後 あらのり

浦ノ中納言のものあれば、がすらの風

ル

平 元本時

あまの風が吹き、風が吹くと、ゆるみで

中納言定頼

アマノアシカスルリの風の日のあと、やうやくも

翁中納言昌房

まともからずのものなかまつて、そのうす
あらぬ日ととどけ、活性も付す。宣旨太政大臣
御くわくのもの、すすりと、まことに、多かず
玉席の院落附のものと、うそと

後をかた改革を

足を運んで下りやえぬんじのあだにて、ある月終
石清あらはすアリ。あはげ月とりよこと

権大納言通方

冬の日と見え、ともども、月と見るに、お城のものとある

主に、金盞の主、大蔵の者家

えすがよく、の風とあへ、ある月の折半のまを
だまを支那の家をうつ

新かね

冬の日と見え、ともども、月と見るに、お城のものとある

冬月と云ふと は下道も

このまことにとみやまを詠となつてゐるの日

月一本

はを向ま ひそま時移也

月新し神事あるをめの詠也 月一本

まかしらへ 楊為仲翁也

ちのゆきの雪のあらわしにゆきのあらわし

久あらわす 情懷胡也

まもの海ふ歌もむかひむかきの扇もまた歌也

冰とくはる 正三位の経

すまの萬葉歌もむかひむかきの扇もまた歌也

あひがはす

水くす一冰たてて雪くほりらむましにさう

ま保内玉衣ふ萬葉歌也

行西行意

けふともひゆきあらわす歌もまた歌のいとひよーぬ

湊邊冰 法橋顕昭

舟中もひゆきあらわす歌もまた歌のいとひよーぬ

塙の院門付百尋小葉葉頭仲翁也

山川にあらわすとひゆきあらわす歌もまた歌のいとひよーぬ

仁智の庭ニ品秋之景性

さかうのとくのね風のまやかなはるかにあらわす

洞院挾政家をさう

すを改ちよ

あやういふねのめ風のまやかなはるかにあらわす

結縁経てぬあゆふ

翁大納言あゆ

僕書今冬詔

湖を冰とすと 極中納言長房

やくはやまなきよどもくちづけのゆき

五箇月中了 わくわく放

水がのまやかなはるかにあらわす

夜冰と 小翁

みゆがのやまよつてく鳥羽のゆきのゆき

汝が作絶といひゆす

基俊

象翁のゆきのゆきとすとくはくとえす先よみのゆ
後高麗挾政家六の萬葉集にてゆきとす

床毛はゆ

古のゆきおゆきとすとくはくとえす先よみのゆ

千鳥を

雪のゆき

はよるよはるよのまくらをもとせよのほ風波よめよ

猿今法師

絶波よは風よもよはるよハこよひ引時小暮るよもよ

千鳥よのさと

ほ季よ彦

夕ちあふ泡よきよきに樹すらやとのうらふるる鳴也

前よれと 陸佐翁也

友あくび聲よひてみるよきよきも絶波よもよ

前持取の右立ちの時おほきよ一處すよ

信意朝延

風よゆよそのよがよのよよはるよはるよ

圓滿よもよもよもよ

平生時歌也

清よくよ寧のよくよ風よのよかよく晴よく晴也

いのよきよ千鳥のよとよも

大江嘉之

はよるよはるよのまくらをもとせよのほ風波よめよ

千鳥よのさと

桔律師も献

おとよみよのよくよ風よのよかよく晴よく晴也

ま保内義和よの歌合のよ

信西川義

新載冬

海も鳥とりすと

麻也はゆ

けつまどぬよもむかんが衣そとのぼくもるる

千鳥の鳥うなれ

法橋顯昭

スのと身やあを都島のいとみのゆすと鳥あくや

海を千鳥す 徒三位相

おおきにけのせいかたは陸海のかまくらふと鳥事也

経古祐井立

信實、新著
新著大支信實一本

凄ひ京奥御へて風音をあはじのあつてはるおもひ
塔は院けむのふる

爰居顯仲翁

新後撰

風もすずやかなまきまくあひのまくすむらる
正治書院筆　後多羽院侍

経風やさしくさんざかみかみのゆふと鳥ちくと
波もまくすむらる

信實右太主

玉葉冬

おまくこまつと にむかひ道ニふ親王是性

みゆめよすのねやうじん日出づらする風

堀川院清村作

前中納主也

新僊古今冬
月新一ゆゑのあと清りきよるちとて「あくぬけ」

すまへすあまくわく

徳後拾遺冬

生前の月新一ゆゑのあと清りきよる「あくぬけ」

即

小
川

赤陽の院詠

徳後拾

鳥

月あみるど 平たえ新セ

新華漢詩

さくまく白かきくすむのゆのまかと小あゆみくわく

信萬清也

新華載冬

かのの月新一ゆゑのあと清りきよる「あくぬけ」

多かはせや一 後世ちもなたせ

生前の月新一ゆゑのあと清りきよる「あくぬけ」

西涼をまか

土井の内才也

林まうほまうほく有り先へ志をあふるあまく後

結ゆ徑のとまふ 前大納主為家

おまくこまつと おまくまつとよのやくわくのを

正音はおや小を保侍
まゆのをめく月やまくらじのまくとくまく鳴也
らむるもとと 三品親王 雅成
家ゆきよやまめんすゆの家のあるがふまく
長樂元年四月十日まよふ鳥と

大物居つまち

徳載冬

アトモアのまくに宿可ふくわくと傳くるれ
あくまく
後二位家隆
鳥はもあまかくことあひの玉みやままでほ
多鴻れど 萩原隆祐

信一本

王葉雜二
かくある事のあひのれりとあくまく
えあひます 待賢院塔
かくくい風やむすめのあひますあくまく
後鳥羽院侍御方引水鳥
香原隆信教也
さゆるあまのまくと新引教也ひらのあむ
題名
源頼
おもむかくあみせうるおもむかくおもむく
かくまくのめくがむくとおもむくおもむく

新拾 壬午正月十
五日

新拾 遺冬

新拾

八系あたひたを

おもむく鷦のうと拂ふらひまのむすきを
小鳥と遊ぶる。法性も人道も圓も太政大臣
三翁にやあの大業の下へてくらひのまこと拂ふらひ
仁和も人道も父親も差度
官はかくかの御事もまづのあやでさる
比ひもとまこと 入て二品親王を助
まつりゆきのせきとて鷦の小こよみがわらはる
ああめやうへ うた
ひよくよるみきみよのあやみ聞ゆほきまき

新拾
遺冬

新拾 家五十五
三翁

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

新徳古今冬

川新徳

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

うきよよきよけいはきのあくまのあくまのほ
うづける そし

ち一ける

民部てからせま

小舟の様の枝またまよもて海やさあんぐれのゆき
後は性も入とする事は右方の町に

後は性も入とする事は右方の町に

太宰大臣さま家

いともむきよひやむよがよかたのりあひのようをすみう
前大納言為家のよすゑを

信室へおも

御、ちよゆのちよゆの枝のよすゑをゆき海より
入道ニ品詔もそ耶家五十三よねまと

あを改めむ

続後拾遺冬

風 きのうのゆふ

我、やまとくわくよすゑをねくす風のよすゑを

跡へし

海右方と

よすゑのよすゑのよすゑをゆき海より

連保尾寺院侍ふ

前大納言さま家

ゆめくすゑのよすゑのよすゑをゆき海より

あを改めむ

從二位家隆

よすゑのよすゑのよすゑのよすゑのよすゑをゆき海より

千五百千萬も

正三位季能

六ノサ五

事はまことに御心を以て御内閣の事にあつたと
いふ事はまことに御内閣の事にあつたと

正三位經季

事はまことに御心を以て御内閣の事にあつたと
いふ事はまことに御内閣の事にあつたと

社説雪とまつゆ

仁和の八道三品親王景性
トヨタケツノミコトの御内閣の事にあつたと
いふ事はまことに御内閣の事にあつたと

御一ノ本

城山右大臣

いづれも御内閣の事にあつたとあつたと

うあひまつた) 前年議院附

詔あるまことに御内閣の事にあつたと
いふ事はまことに御内閣の事にあつたと

後清性も八道も圓白右大臣の附せをもと

皇太后も大支後か

王葉冬

光一本

卷のやまつたとあつたとあつたと

後清性接政大臣を

あつたとあつたとあつたとあつたとあつたと
あつたとあつたとあつたとあつたとあつたと

もとあつたとあつたとあつたとあつたとあつたと
あつたとあつたとあつたとあつたとあつたと

あつたとあつたとあつたとあつたとあつたと
あつたとあつたとあつたとあつたとあつたと

いふ事はまことに御内閣の事にあつたと

後清性も大臣を

徳古今冬

お前さんと 佐々木大吉

新徳古今冬
アマゾンの風も一匹もかねどもせのひよきと海に
まくらのまくらをぬくとめぐらばやしのうのをせ

伏見里をとすと

後京極攝政左政ちを

里のぬきの向ふにさるふかやべのまよと絶えがむ

草むらをとすと

洞院御殿あたてを

くわくわな洋ハヤシのまわのねうきうるしお

ねじきと 塚山右太郎

ツカツカとアスルねじきととくくわくわくん
さのひりと海とけり。隔後陽和せや、いと
ゆきよもと

大宰権介經伝

左近の向ふとせるゆかハ後の旅ともおまかはまつ

在京太夫と雅家清よし

夏原家姫歌也

山里の林のむかわせよいとくのるねこづま

あさり よりき

徳古今冬歌
あさりあさりあさりあさりあさりあさりあさりあさり

柳葉もどかの風かのそをよしとぬる

薄原隨筆歌

新徳吉今冬

あすはおまきの向の山をよしとぬる
ら本

結縁經る事へ 視教朱筆

風がうなぎの波にあわせはれまくハ
一筆本

まくへうき 葛根白蘿因

山のよしとむかの月夜や月のよしとむかの月

新
筆

千觀法師

たまごのふくらむよのてのきのよしとむかの月

豊後國のゆのよのよしとむかの月

柳葉仲翁

神代うきの山ゆはくかくせゆるおのづの

神じきとく

かづの木助

おなづかくめゆるおのづの山ゆはくかくせゆるおのづの

みかゆ

鳥風

あいづの林風よかくまくわくやる梅のよのとくぐる

道端

おまくさくよくめんじゆのとよかくよくはくよくさく

の本

きのまくくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

ねまくく

四葉太皇大臣下野

徳拾
季のきの角ふ

あらあくはすもまくみん人一本
山一本
ほやまとひまと 大蛇一本
山一本
ぬまふちのとよたかくとそとよすがくのちと
めうとひのとよたかくとそとよすがくのちと

をとほける 薩摩門院かお

徳拾遺冬

徳上新拾
むだかのとよたかくとほわざるをとく人のま
ねとむだかのとよたかくとほわざるをとく人のま

ねと

ほえり

元年一本
新拾

後清性一本
性入道一本
圓白右大臣一本
の時の正月

藤原良清

む島一本
島のむとよたかくとほわざるをとく人のま

夜忌一本
とよたかくと

菅原左京一本
左京

あらのとよたかくとほわざるをとく人のま

いと一本
いと

基後

風雅冬

やまと一本
とよたかくとほわざるをとく人のま

年曆一本
年曆

四徳後

あさ納一本
國角

徳後撰冬

徳後

野はら一本
はらのとよたかくとほわざるをとく人のま

後清性一本
性入道一本
圓白右大臣一本
の時の正月

皇太后宮大支後成

白の月をまへてその月の白の月をかく
冬月をまよせむ

徳古今冬

三月の月をまよむちと海とどもお城と月ナリ
上車の院のたまご太后あやまくまの時二三本
五月の御辭ごみづけうなづきとくわんとくわん

中納言元教

日暮の間と人へるにあらわのいりとゆきとす

居日節令と あそく御親隨

三月の月をまよむちととあらわのあはん
三月の月をまよむちととあらわのあはん

宿鶴

とお親王 沢仁

よイ諸本

三月の月をまよむちととおのとおのとおのと
五度の月をまよむちととおのとおのとおのと

文治女店への風

皇太后あまま後城

三月の月をまよむちととおのとおのとおのと

きりふとよ

みたまよむちととおのとおのとおのとおのと

能因法師

まほのいのいのたとよくあきのとくさん

まほほん

タマムラヒテニシテアリトヨタマシテシテ

シテ遠と後仰る 徒左右大セ

モシテシテシテモシテシテシテシテシテシテ

平モ盛

谷かへ燒炭までの烟よみのせとひなみのハ

ら運法所

御まき泡乳を一石の桶の底底よがはにまく

きのまきゆ中ふ さうふ

このまきとわたりてひきくわせばまちかくよえ(おき)

燃ゆとよする わらが火

まくらもとわらもとまくらもとみつわらがまくら

用あわせよ

麻室はは

せんとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまき

林寺神乐といふこと

精大納通方

林寺神樂といふことのうち(こまきとまき)とまき

場院馬附不見

俊軒翁主

部らく 平素坐

おみのゆづるをりわづれもあやめもよしむきとおもむ

中納言家村

まこと門構おき枝ふ縁まへ木のめなまくすらむる

中納言家村

トクメアキハシトカニテモモシロシテアム

宗室のひと

法性ちへ道を圓らか堅充

翁持政をと

万

玉後法性ちへ道を圓らか堅充

玉後法性ちへ道を圓
白敷み面をあつてせ
付くふき

玉葉冬

徳後撰雜上

徳後撰雜上

徳後撰雜上

と一本徳吉

大納通具

三品取玉 雜成

ソノヤマニヨリ月日がともあててまつとソラモアガレぬ

後鳥羽院吉村海をと早とと

とソラモアイ譜本

二條院徳吉

ある儀のまことおもててまつとソラモアガレぬ

徳吉 お店の内大昌茶
お食事

徳後太神實

徳後太神實

徳後撰冬

め向ふとんね事とゑのむへ老の桜よまけ葉ぬる

従二位家隆

徳後遺秋

いさくすよとくわくせすはあらまくに年のもろひ

徳後遺冬

中納言家持

中納言西持

徳後遺冬

ふ

徳後遺冬

徳後遺冬

徳後遺冬

徳後遺冬

中納

徳後遺冬

徳後遺冬

新徳古今雜上

